

内視鏡所見のよみ方と鑑別診断—下部消化管 第2版

多田 正大, 大川 清孝 著
三戸岡英樹, 清水 誠治

消化器診療に携わるすべての臨床医必携の書

九州大学大学院教授・病態機能内科学

飯 田 三 雄

このたび医学書院から「内視鏡所見のよみ方と鑑別診断—下部消化管 第2版」が発刊された。多くの内視鏡医から好評を博した初版の上梓から約7年がたち、企画の意図は初版のまま、時代の進歩に即した内容の充実が図られている。その結果、初版より掲載症例と写真は大幅に増加し、頁数も約1.7倍に増えているが、日常臨床の現場で容易に活用できるサイズは維持されており、初版以上の売れ行きを示すことは間違いないであろう。

本書の執筆者は、いずれもわが国を代表する消化管形態診断学のエキスパートであり、東京で毎月開催される早期胃癌研究会の運営委員やその機関誌である雑誌「胃と腸」の編集委員を歴任してこられた方々である。そのため、本書は「胃と腸」誌と基本的には同様の方針で編集されている。すなわち、掲載された内視鏡写真に限らず、内視鏡所見の成り立ちを説明するために呈示されたX線写真や病理写真に至るまですべて良質な画像が厳選されており、“実証主義の立場から消化管の形態診断学を追求する”という「胃と腸」誌の基本理念が貫かれている。

本書では、第1章から第3章までが下部消化管内視鏡に必要な基本的事項、局所解剖、診断手順などの総論的な内容、第4章が「腫瘍性疾患の内視鏡所見のよみ方と鑑別診断」、第5章が「炎症性疾患の内視鏡所見のよみ方と鑑別診断」によって構成されている。前半の総論部分では、第1章の「安全な下部消化管内視鏡のための基本的事項」が新設されたほか、第3章の「下部消化管内視鏡の位置づけと診断手順」において初版後に開発されたダブルバルーン内視鏡やカプセル内視鏡、大腸内視鏡の挿入手技などが追記されている。また、巻末には、基本的事項の付録として、大腸癌の分類、Crohn病や潰瘍性大腸炎の診断基準などの表が追加され、初学者や経験の浅い内視鏡医の理解を助けている。

本書の各論部分に当たる第4章と第5章では、種々の腫瘍性疾患と炎症性疾患が所見別に呈示されている。この2章で全体の約87%の頁数が割かれており、本書の根幹を成している。初版では各所見ごとに見開き2頁で4症例が呈示されていたが、第2版では各所見別に4頁を使い最大で8症例が呈示されている。

そのため、掲載症例は474例、写真は1,200枚以上と初版に比べ大幅に増加している。内容的には、第4章で大腸炎関連大腸癌の呈示症例が増えたほか、第5章でcolitic cancerの臨床病理診断についての解説が初版以降に集積された新知見とともに書き加えられている。

本書では、見開き2頁の左頁には内視鏡写真と簡単な臨床情報・内視鏡所見が箇条書きで示され、右頁には診断・疾患の解説がX線・病理写真の呈示とともにわかりやすく記載されている。右頁を隠し左頁のみを見て自身の診断力を試すことも可能のように配慮されており、消化器関連学会の専門医試験を受験する者にとっても便利である。また、ポピュラーな疾患からまれな疾患まで多彩な症例が美しい写真とともに掲載されており、かなりの経験を積んだベテランの内視鏡医にとっても役立つ内容となっている。

このように、本書は消化器診療に携わるすべての臨床医にとって、必携の書と考える。

●B5 頁356 2009年 定価12,600円
(本体12,000円+税5%)

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)